

発行  
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018  
札幌市中央区北 18 条  
西 15 丁目 3-19 安藤方  
電話・FAX 011-556-8834  
hokkaidopolandca@gmail.com  
http://hokkaido-poland.com/

# POLE

第 89 号 2016. 9. 1  
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会  
東京事務所

〒107-0052  
東京都港区赤坂 9-6-29-309  
音響計画株式会社 霜田気付  
電話 03-6804-1058  
FAX 03-6804-6058

## 総会&お茶の会 にお越しく下さい!

どなたも  
入場無料  
ケーキつき

### 第30回定例総会とお茶の会(お知らせ)

日時 2016年10月29日(土)総会 14:30～、お茶会 15:30～

会場 北海道大学クラーク会館 3F 国際文化交流活動室(北8西8)

総会・お茶会に参加して、これからの協会の在り方や行事についてアイデアを交換しましょう。

一人ひとりの創意工夫から協会の新しい活動が生まれます。音楽、詩歌、演劇、ダンス、絵画、映画、文学、歴史から料理まで、ポーランドと日本・北海道の文化交流にかかわる多彩な企画を歓迎します。

お茶会では、ヨーロッパで歌姫として活躍したテイコ・キワ(喜波貞子)の人形の物語「わたしはテイコです」の紙芝居(田村和子作)が日本語とポーランド語で上演されます(朗読 熊谷敬子、ラファウ・ジェプカ)。



テイコは長崎医学校のオランダ人教官の孫で日本人の血を受け継いだオペラ歌手です。岩手県在住の芸術家児玉智江さんが素晴らしい原画を描きました。

また6月の東京例会、2月の雪まつり国際雪像コンクールの写真の紹介もあります。

(上) 第 29 回総会・出版  
祝賀会 (2015.10.17、ホテ  
ルガーデンパレス)

(右) 第 28 回総会・懇親  
会 (2014.10.31、北大クラ  
ーク会館)



《第78回例会》



スタイル・ブリゼ(Style brise)とは、17世紀にフランスのリュート音楽の分野に起こった分散奏法で、優美で即興的な趣味に富む技法のこと。同時代のフランスのクラヴサン奏者や、J.S.バッハに至るドイツの音楽家は主に鍵盤音楽の分野にこれを取り入れた。F.ショパンの音楽には、バロック及び前古典派からの影響が見られ、まず旋律の中の和声音を保続する基本的な方法としてこれを用い、オクターヴの分散化や、高度な対位法との融合等の方法でピアノ技法に様式化した。



《お話1》

- ♪ F.クーペラン:クラヴサン曲集 第1巻第5組曲イ長調より(ロジヴィエール)、J.S.バッハ:フランス組曲第2番ハ短調より(アルマンド)
- ♪ ショパン:練習曲 変ホ長調 作品 10-11、ノクターン 嬰へ長調 作品 15-2
- ♪ ショパン:バラード第1番 ト短調 作品 23

加藤 一郎

加藤 一郎  
久保田 友  
國谷 聖香

《お話2》

- ♪ ショパン:練習曲 変ホ短調 作品 10-6、ノクターン ロ長調 作品 62-1
- ♪ ショパン:ソナタ第3番 ロ短調 作品 58
- ♪ ショパン:バラード第4番 へ短調 作品 52

加藤 一郎  
坂田 朋優  
長崎 結美  
田口 綾子

加藤 一郎 (かとう いちろう)

東京芸術大学器楽科ピアノ専攻卒業、ヴィンタートゥア音楽院ソリストコース留学、金沢大学、愛知県立芸術大学等を経て、現在、国立音楽大学准教授。リサイタル、協奏曲、室内楽、伴奏等の演奏活動、及びNHK テレビ・ラジオ等に出演多数。



2016年  
**10月2日(日)**  
 13:30 開演  
 (13:00 開場)

札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール (北16東9)  
 入場料: 一般 1500 (当日 2000) 円、学生 500 (1000) 円

お問合せ先: 011-556-8834 (安藤)、080-4049-0956 (当日のみ)  
 e-mail: hokkaidopolandca@gmail.com  
 プレイガイド: 大丸 011-221-3900、道新 011-241-3871  
 お席に限りがあります(約100席)。お早めにお求めください。

# 紙芝居「わたしはテイコです」について

田村 和子

ずいぶん昔の話になりますが、1950年代の札幌には紙芝居の上演を仕事とする人が結構たくさんいました。主に中年過ぎのおじさんだっと思いますが、荷台に木枠をくりつけた自転車を広場や通りの一角に止め、拍子木をたたいて子どもたちを呼び集めました。拍子木の音を耳にするとわたしたち子どもは家族に小銭をもらい、一目散に自転車の前に駆けつけたものです。紙芝居のおじさんはお金を受け取り、棒付き飴を渡してくれました。そして、いよいよ紙芝居のはじまり、はじまり。舞台と呼ばれる木枠の中で繰り広げられる物語の世界にわたしたちは飴でべとべとする手を気にしながら引き入れられてゆきました。

ワルシャワ市内にあるパヴィヤク監獄博物館では毎年9月末から10月初めにかけての数日間を「パヴィヤクを記憶する日」として様々な催しが行われています。博物館の歴史に関わる講演会、映画の上映会、コンサートなどです。その期間にはワルシャワ市内外の小中学生、高校生が見学を訪れ、展示物を見たり、催し物に参加したりしています。

紙芝居「わたしはテイコです」(絵 児玉智江、文 田村和子)はそんな見学を訪れた小学5年生のピョートル少年が博物館内の暗い廊下に迷い込み、そこでかつての囚人カミラ・ジュコフスカが作った日本人形に声をかけられ、戦争の悲話を知るというストーリーです。わたしは2009年に刊行した拙著『ワルシャワの日本人形』には描ききれなかった部分をこの紙芝居に込めました。

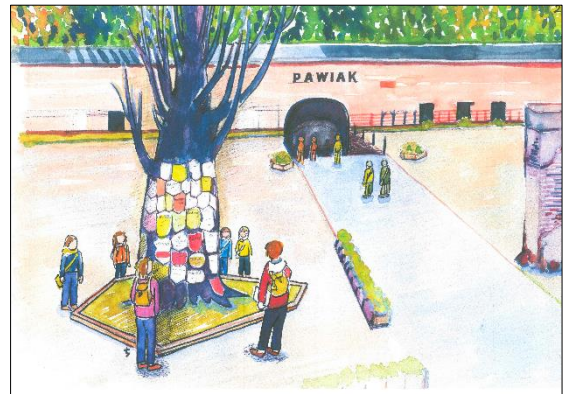
今ポーランドでは紙芝居人気が高まっています。紙芝居はポーランド語では *teatr papierowy*、あるいは *teatr obrazkowy*、*teatr narracji* と言うのだそうです。オシフィエンチム子ども図書館には、紙芝居の魅力、教育的効果を熱心に広めているメンバーがいて、彼女の話では、上演後にもう一度物語の世界に浸ろうと、舞台である木枠の中に入ろうとする子までいるのだそうです！（たむら かずこ）

(参考図書)

- 松永伍一『蝶は還らず: プリマ・ドンナ喜波貞子を追って』  
毎日新聞社、1990  
兵藤長雄『善意の架け橋: ポーランド魂とやまと心』文藝春秋、1998  
田村和子『ワルシャワの日本人形: 戦争を記憶し、伝える』岩波ジュニア新書、2009



ぼくはポーランドの首都ワルシャワ市に住む小学校5年生です。名前はピョートルと言います。



9月のある日、学校の社会科見学でぼくは市内にあるパヴィヤク監獄博物館に行きました。博物館の前の広場には一本の不思議なニレの木があって、木の幹にはここで死んだ人の名前が書かれたプレートが何枚もぶら下がっています。



「わたしはテイコです。わたしを作ったのはここに投獄されていたカミラ・ジュコフスカさんです。監獄の中でカミラさんは戦争前に見たオペラのことを思い出し、日本人形を作ることにしたのです。」



「カミラさんは『蝶々夫人』のプリマ・ドンナだったキワ・テイコの大ファンでした。テイコは日本で生まれ育ったけれど、おじいさんとお父さんはオランダ人で、オペラ歌手になるために日本からイタリアに渡って勉強し、ポルトガルでデビューし、戦争が始まる前にはポーランドにも何回か来て公演しています。」



「刑務所に入れられてから2年後の5月のある夜、カミラさんはおよそ 220 人の囚人たちといっしょにワルシャワ郊外の森の中に連れ出され、そこで銃殺されました。戦争が終わってすぐの頃、ポーランド赤十字が森の中から死体を掘り出しました。身に着けていた特徴的な花柄のブラウスから、カミラさんの遺体はすぐに見つかりました。」

《新会員のひと言》

## 灰谷慶三先輩の思い出など

若松 雅迪

今年6月の「午後のポエジア」でポーランドの曲「今日は帰れない」を歌う機会をいただいた軽度認知症・脳梗塞の元氣な老人です。私は国文科卒業ですが、協会の重鎮(第三代会長)灰谷慶三先輩のゴージャスに触れた最終講義を拝聴してから既に十数年を超えます。「3年8組灰谷慶三」と名乗って札幌西高校生徒大会で演説された私たちの高校時代から 61 年が経過して、文学部学生時代の頃の激動まで夢のように想起されます。大学は異なりますが、同時代でやや後輩の加藤登紀子さんがフランスのシャンソン歌手の持ち歌として最初に耳にされた「今日は帰れない」が、実はポーランドのバルチザンの歌だったことを知ったのはつい昨日のようです。



灰谷元北大文学部長、荒木俊夫同法学部長ほか、今ご存命なら米寿前後の皆さんは、60 年安保闘争の渦中で唐牛健太郎全学連委員長(当時北大)や岸政権に虐殺された樺美智子さんや私たちを先導した先輩です。加藤登紀子さんとその夫君、藤本敏夫全学連委員長はそれに続く世代でした。

「今日は帰れない」(スタニスワフ・マギエルスキ作詞・作曲、加藤登紀子訳詞とギターと歌)が NHK BS

の番組で放送された頃、確かに冷戦は過ぎ去りナチスやソ連の圧政も過去の歴史となったようでした。しかし今も世界中で、当時のポーランド市民と同じ苦境にある人々に目を向けずにはいられません。普通の市民が身を隠して逃げ惑わなければならぬ時代は、今も同じです。

高校で灰谷さんと同じ文芸部だった亡妻が 1947 年、義母義弟たちと命からがら旧満州から引き揚げてきた、その日中戦争での南京大虐殺も、日米戦争での沖縄戦や東京大空襲も、広島・長崎の原爆も、大多数の庶民が殺された戦争です。ヨーロッパの対独戦争、対ソ連抵抗運動も、現代のアメリカ対中南米、アラブ、アフリカも、イスラエル対イスラムも、アフガン、パキスタンなども、他のいくつもの国での内乱や侵略戦争も同じ繰り返しです。

1999年3月から4月の40日間ベルリン市マルデブルクの次男のアパートに亡妻と泊まり、さらに鉄路で国境の街フランクフルト・オーデルを訪れたのはポーランドが EU に加わる前日でした。検問所を通る最後の旅人だった私たちに、東の間ですが対岸を散歩中のポーランドのお二人が温かく接して下さったのを今も忘れません。

こちらは英語カタコト、あちらはポーランド語とドイツ語と、言葉も通じないポーランド人父娘とわれわれ日本老夫婦。やむなく数字を紙に書いて自分の年齢だけを伝えて、数分の中に NHK の相撲中継の話やお二人が川を挟み国境を隔ててその日まで苦勞されたことまで知りました。

東欧のオーデル河とナイセ河の国境のことはフランス側からドイツの侵略を批判した「最後の授業」

(アルフォンス・ドーデ短編集『月曜物語』(1873)所収、副題「アルザスの少年の話」)の邦訳で小学生のころ接しましたが、ナチスやスターリンの圧政にどれ程の苦労を経験されたことでしょう。

ベルリンでは、次男の住居のそばの壁記念館やユダヤ記念館、アウシュビッツより巨大なオラニェンブルク強制収容所、チェックポイント・チャーリーなどを訪ね、ベルリン市民、特に小中学生、先生、ガイドさんたちや次男のバレエ仲間等の幾人かと話して、一見に優るとも劣らないお話で大戦や冷戦当時のさまざまを知りました。大戦で加害者にも被害者にもなったドイツ・日本と違い、常に被害者だったポーランドはじめ東欧の人々をもっと知らなければと痛感しました。

帰国後 10 年ほど経って、妻を癌で、灰谷さんを脳梗塞で喪い、あまりにも多くの「戦友」を送るはめになりました。私たちが「戦友」と呼ぶのは、せいぜい子育て戦争や日常の対占領軍抵抗運動や反戦護憲の闘いに過ぎませんが、世界中で戦争そのものが続いています。そして安倍政権のもと、日本も戦争にまっしぐらの昨今、困ったものです。

(わかまつ まさみち)

## ほんのひと言

稲川 和幸

手元にある『ポーランド革命』(岡田春夫・工藤幸雄・佐久間邦夫著、亜紀書房、1981)を開くと序章にもあるように、ポーランド人は親日的なのですね。直航便も出来たことですし、クラカウ等を訪れてみたいものです。



『ポーランドを知るための 60 章』(渡辺克義編、明石書店、2001)を早速購入し、コツコツ読み始めました。「シュラフタ」という言葉に接して、懐かしさがこみ上げてきました。「国際政治」を受講した際、〈ポーランド外交史〉を聴く機会があり、「シュラフタ」という語に最初に出会ったのはこの時でした。

あと3年ちょっとで 70 の大台に達する日々、孫姫2人とたわむれることが多くなりました。高校の教壇を降りて早5年が経過しています。週に1~2度、はるか遠く蘭島ミニミニ農園へ妻と2人、車で通い、小農作業で発汗しています。今の季節、海から吹きつけるぬくとい風はナマラ心地良いものです。

初夏恒例の北大祭。留学生の活躍するポーランドテントへ2度も足を運び、「ラツヒ」(リンゴパンケーキ)

と「キェウバサ」(ソーセージ)が特に気に入りました。今回は孫姫も加えてぜひ参加したいものです。

この2月の例会、新井藤子氏講演会「ピウスツキと日本、北海道、先住民族」では、実り豊かな研究報告を拝聴できました。新しい視点から切り込んで来る迫力あふれる発表には大いに啓発されました。

本物の会員になるためには、本場産の「ズブロッカ」(貴重なバイソングラスを漬け込んだウオッカ)は欠かせないとか(??)。何店か巡り歩いて、やっと入手した一本。ショパンのファンでもある妻と共に、会の発展を祈って、まずは乾杯と致します。

末筆になりましたが、血液型はB型、生まれは小樽市、星座は乙女座です。皆様どうぞよろしくお願い致します。  
(いながわ かずゆき)

## 入会のご挨拶

熊谷 敬子

お付きあい重ねる毎に敬愛増す長屋様からのご縁によりまして、昨年5月午後のポエジアに参加のお席を頂き、引き続き今年もお呼び頂いた感謝と親愛を表すには入会という事が何よりかと、申し込ませていただきました。どうぞよろしくお願いいいたします。



昨今カルチャー教室やイベントでも盛んになってまいりました朗読ですが、自分では「語り」と読んでおります。震災の翌 2012 年、忘れないための証を自分の振る舞いとして伝えようと、音楽と語りのライブ活動を開始。名前を「つむぎびと」と称して、音楽の旋律をことばと動きにのせて物語るステージを試みてまいりました。

主に優れた児童文学の秘められたエッセンスは大人こそ対象にしたいとの思いがあります。幼心の柔らかさと純粋な健気さを表した児童文学に大人が対面することは、混沌とした方向へ向かう危惧がある今、意味があるのではないだろうか、と。

技巧、修練共に甚だ未熟なところではありますし、付け焼き刃が剥がれぬかとハラハラしながらの語り人、未だ途上にはおりますが、さらに精進して語り継ぐべき物語を探求したいと思っております。

ポーランドの文化、芸術の深い憧憬へと知性も拓がるよう、皆様との更なる交流の機会もご期待申し上げます。入会のご挨拶といたします。

(くまがい けいこ)



## 第6回「午後のポエジア」スケッチ

若松 雅迪

友人霜田千代磨さんからのご指示で小林暁子さんに「今日は帰れない」を歌うとお伝えしたところ、キーボード伴奏までしていただくことになった。

前日は打ち合わせも済みリハーサルを開始、他の朗読の方々のエンジンもかかる頃、用意した配布資料7ページを10分に収める「朗読と歌と語り」を決める。千代磨さんが駄目出しをしてくださった。

当日、狭くはないホールに並ぶ椅子の数は数十。まずラファウ・ジェブカさん、栗原朋友子さんの司会で、進行予定はポーランドの少女たちの到着に左右されるとか、持ち時間の10分も怪しくなった。

とにかく斎田さんとレナタさん、小林さんとミハリナさん、二組の朗読に続けて始めた。歌は、江別の小劇場では伴奏の音源に合わず失敗だったから、安藤むつみさんに合わせていただく贅沢。朗読も語りも長過ぎずに終え、歌い始めた。伴奏が奇麗で大成功。パルチザンの悲劇も伝え得た。

つづいて、朗読にも衣装が抜群の効果ありと魅せてくださった熊谷敬子さん、自信に溢れお見事。

斉藤征義さんの朗読は草野心平の「蛙」関連3篇。いつもより熱が入って新境地の盛り上がり。「ぎゃわろっ」はじめ、まるで新蛙語を聴くようだ。岩見沢で拝聴した若松丈太郎さんの詩は、お寺の講堂が広すぎて難聴の私には聞き取れなかったの、一安心。征義さんはこうでなくっちゃ。

宮沢賢治の「無声慟哭」3篇は高校の教科書などでお馴染みゆえ、かえって朗読は難しいのだが、多少のご不自由を着席朗読でクリアされた松永吉史さん。後で歌誌『由紀坐左』のお仲間と知り、わが記憶障害にあきれた。

三味線の花季汀蘭さんは流石。この優美な楽器

にポーランドの皆さんも興味を持たれたことだろう。折しも北大祭で立ち寄った若者にもいい刺激だ。

さて、最後はメインの即席高座。木魚、篠笛などが用意され、千代磨さんの一人芝居が始まった。愚安亭遊佐さんの向こうを張る出色の熱演。

演目が全て若松丈太郎さんの詩とは嬉しい。3.11以前から知る人ぞ知る福島の大詩人、最近ようやく北海道にも、岩見沢のお寺や江別の小劇場を拠点に広まってきた。埴谷雄高研究の古くからの先輩で、福島第一の爆発以前から警鐘を鳴らされていた丈太郎さんを、千代磨さんがお寺に招いたのは一昨年の花祭だったなあ。

一人芝居は端で見るほど楽なものではない。高座の役割を担う半畳の畳が恰好の舞台装置となつて、フィナーレを飾るにふさわしいパフォーマンスだった。万場の拍手鳴りやまず。福原光篠さんの篠笛の小気味好さも手伝って、初めて接した皆さんにも大いに感動していただけたのではないかな。

その後はケーキと餃子の大サービス。さらにプロのヨアンナ・ヴィシュコフスカ先生がダンスを教えてくださいました。生徒は老若男女30人。ステップの基礎、ボックス、ターンと、司会のラファウさんの通訳で大事な基本を短時間で教えてくださいました。私のような元壁際青年にも十分理解できたが「解る」と「踊る」は大違い、汗だくになった。子供たちには容易なのだろうが、楽しそうに輪に入ってくれた。ご参加の皆さんも十分満足されたに違いない。

協会の皆さんの「打ち上げ」にも図々しく参加して話題も尽きず、文字通り美味しいお蕎麦屋さんでの会で、初参加で新会員になってしまった。

(わかまつ まさみち)

出演者一同  
(左4番目が筆者)



〈司会〉  
栗原朋友子、  
ラファウ・  
ジェブカ





(左上から)1 レナタ・シャレック&斎田道子、  
2 ミハリナ・ミコワイチャック&小林暁子、  
3 若松雅迪、4 熊谷敬子、5 斉藤征義、6 松永吉史、7 菅原みえ子  
9 浅井雄介、10 バルバラ数井、12-13 福原光篠 & 霜田千代麿、11 花季汀蘭、8 長屋のり子

(左下から) 14 河村恵李アンナ&明希カリナ、  
懇親会(安藤厚会長、小笠原正明副会長)  
〈ダンス〉ミコワイ・シェプカと仲間たち、15  
〈ダンス指導〉ヨアンナ・ヴィシュコフスカ  
(敬称略、数字はプログラム番号、写真: 尾形芳秀)





## 第6回「午後のポエジア」より

タデウシュ・ルジェーヴィチ

## 生き残り

ぼくは二十四歳  
 屠殺場へ引かれて行き  
 生き残っていた。

ここに掲げる名は無意味な同義語だ——  
 人間と動物  
 愛と憎しみ  
 敵と友  
 闇と光

人間は動物なみに殺される  
 ぼくは見ていた——  
 屠殺された人間を積んだ荷馬車を  
 彼らは救済されることはない。

概念は単なる語にすぎない  
 美德と悪徳  
 真実と虚偽  
 美と醜  
 勇気と臆病

美德と悪徳は 重さが同じだ  
 ぼくは見て知っていた——  
 不品行で同時に徳の高かった  
 一人の人物を

ぼくは教師で師匠である人物を求める  
 その人がぼくに視力と聴力と言語を取り戻し  
 いま一度、事物と概念に名を与え  
 光を闇から切り離してくれるように、願う。

ぼくは二十四歳  
 屠殺場へ引かれて行き  
 生き残っていた。

詩集『不安』*Niepokój*(1947)より  
 栗原成郎訳

《解説》 タデウシュ・ルジェーヴィチ(1921–2014)はラドムスコ Radomsko(チェンストホヴァ北方の小さな町)に生まれました。第2次大戦中は「国民軍」のパルチザン兵士でした。その点ではアンジェイ・ワイド監督の映画『灰とダイヤモンド』の主人公マチェックと同世代の人です。この詩は1人称単数の詩的独白の形式をとっていて、「二十四歳のぼく」はナチス・ドイツ軍と地下組織で戦い、ナチスの降伏によって「生き残った」が、戦後のソ連型共産主義へ豹変したポーランド政府からは「ロンドン亡命政府」に協力した廉(かど)で政治的犯罪者扱いされて行き場を失った「死によって汚染された」若い世代を代表しています。この詩を収めた詩集『不安』によってルジェーヴィチは彗星のごとく戦後の詩壇に登場しました。現在も人気のある詩人です。

アウシュヴィッツ、マイダネック、トレ布林カをはじめ複数存在した強制収容所は、ポーランドでは「ヒトラー絶滅収容所」と名付けられているように「人間が動物なみに集団殺戮された」まさに「屠殺場」でした。ルジェーヴィチの兄はゲシュタポ(ナチの秘密警察)によって銃殺されました。パルチザン兵士のルジェーヴィチ自身は収容所の囚人ではありませんでしたが、約束されたソ連軍の援軍は来ず、武力に勝るドイツ軍との戦闘の場は抵抗不能の「屠殺場」にすぎませんでした。そして戦争直後のポーランド社会では、文化も、言語も、道徳も、宗教もすべての価値が崩壊しました。光と闇、人間と動物、愛と憎悪、美德と悪徳、真実と虚偽などのアンチテーゼが対立の意味を失い、同価値のものとなり下がった混沌が出現しました。

ルジェーヴィチは混沌からの世界の再創造を希求します。無から有を、闇から光を創造してくれる「教師」を探し求めています。それは人間を超えた存在であることを暗示しています。(栗原成郎)



ルジェーヴィチ(左)とギュンター・グラス(2006)  
 Photo: Michał Kobylński



# ウッジからのご挨拶～これからもよろしく！～

吉田 勝一

## 1. ウッジ市の歴史と背景

ウッジ県はポーランドのほぼ中央に位置し、県都ウッジ市はワルシャワから西南西へ約 140km、人口は約 82 万人、ポーランド第3の都市である。1800 年代以降ユダヤ、ドイツ、ロシア、ポーランドの4民族が入植し繊維産業を起すまで、人口数千人の村にすぎなかったが、繊維産業の飛躍的発展に伴い、たくさんの女工や関連産業労働者が近隣農村から集まり、1900 年代初めには東欧のランカーシャと呼ばれるまでになった。

現在の都市建築はそのころ完成したアールデコ様式のもので、ポーランドでは最も新しい都市として、道路も碁盤の目状に区画整理され、領主館や王城を中心に同心円・放射線状に伸びた他の都市と異なった、非常に興味深い景観を作っている。さらに、人口の大半が工場労働者で、ユダヤ、ドイツ、ロシア、ポーランドの4つの文化の融合するきわめて特殊な都市として発展した。1900 年代初頭にはパリ万博に出演した「川上音二郎一座」がウッジを訪れ、工場労働者一般市民に歌舞伎などを見せている。ポーランド研究者には、国の発展ぶりを見るなら首都ワルシャワ、貴族の歴史や文化に触れるなら古都クラクフ、ポーランド人気質と庶民に出会うならウッジと、認められている。

第二次大戦中空襲に遭わず、戦後ワルシャワの首都機能が麻痺していた一時期はウッジに行政の中心があった。その後市内の高等教育機関が統廃合され、ルブフ大学(現ウクライナ)からの引き上げ研究者などを吸収してウッジ大学、工科大学、映画演劇大学(ポーランド唯一)、美術大学、医科大学、音楽大学などが設立され、ワルシャワに次ぐ教育文化都市となった。繊維産業の縁でフランス・リヨン市と姉妹都市提携を結び、ウッジ大学内に名誉領事部が置かれ、学生交流も盛んである。

1990 年代以降、社会主義崩壊と自由化に伴う合理化政策で繊維産業は壊滅的打撃を受け、失業率は 30%に達した。2000 年代にはローマ＝グダニスクを結ぶ南北線と、ロンドン＝モスクワを結ぶ東西線がウッジ市郊外でクロスする EU 国際道路建設、コンピューター通信機器の DELL 工場進出などに伴い、失業率も 10%前後に持ち直し、経済活動も盛んになった。市内各所に残る広大な工場跡地が外国資本のハイパーマーケットやヨーロッパ



よしだ まさかつ 埼玉県生まれ(父は戦争中、国後島に派兵され札幌で終戦)。札幌大学ロシア語学科卒業、北大スラブ研究センター研究生、ワルシャワ大大学院教育研究所給費留学。国立ウッジ大学国際関係政治学部日本学講座、元ポーランド日本協会ウッジ支部会長、現(法)梅田良忠教授記念ポーランド日本教育文化センター代表。ポーランド人妻と娘一人、夏はオポーレの古農家で 11 匹の猫たちと共同生活。

有数の面積を誇る一大アミューズメント地区、都市型総合住宅マンションなどに生まれ変わった。

一般にウッジは工場都市のイメージが強く、2000 年代初頭までほとんど変わらなかったが、最近5年間の変貌はすさまじく、現在ポーランド国内で一番変貌が著しい街、生活する街といえる。ウッジファブリッチナ(ウッジ工場)駅は目下地下ホームの建設中(もはや映画「約束の土地」1974 の面影はない)、来年開業を目指し地上部、周辺道路の整備を進めている。今まで2時間半以上かかったワルシャワへの連絡が高速列車で1時間 20 分と便利になる反面、私の学部は駅隣にあるため、駅前のメインストリートでキャンパスは二分されてしまった。

また、自由化以降、前記の6国立高等教育機関に加え、経営大学、人文経済大学、国際関係大学、デザイン美術大学、教育大学など 17 の私立大学が開校し、現在約 13 万人の大学生がウッジで学んでいる。こうした民間大学の中には、特色を出すため日本語教育など目新しいものを採用する傾向もあるが、教員・教材の準備不足、安易なカリキュラムなどから十分な日本語教育には至っていない。EU 加盟によりポーランド人も自由に EU 諸国で労働(出稼ぎ)あるいは就職できるようになり、学生もポーランド国内に限らず、EU 諸国の大学にも自由に入学、進学できるようになって、留学が飛躍的に増加した。これは教育の機会均等という面では多大な貢献だが、逆にポーランドの大学、企業が EU 諸国の波に晒され、雨後の筍のように増えた私立大学は今後どれだけ生き残れるか厳しい状況に置かれている。これらの現象はウッジ市に限らず、ポーランドの主要都市どこでも同様の傾向にある。

## 2. これまでの日本との教育文化交流

戦後ウヅ工科大学と北大工学部との共同研究で相互の交流が始まった。日本から工学関係者が定期的にウヅに来訪し、1980年代には北大工学部から小笠原正明教授、澤村貞史・晃子教授らがウヅ市に長期滞在し、研究生生活の合間を縫って市民との文化交流活動に尽力された。1990年には当時の工科大学長 J.クロウ教授(元ポーランド日本協会ウヅ支部名誉会長、元ウヅ市副市長)に日本政府より勲三等瑞宝章が授与され、また旭川高専学長吉田宏教授(2002年度)、東大工学部染谷常雄教授(2003年度)らに工科大学より名誉博士号が授与された。ウヅには来られなかったが、相馬純吉教授はウヅという街を理解し、北大留学中のクロウ教授の親日感に影響を与えた一人だった。最近では2015年10月にコシノジュンコ氏が服飾デザイナーとしてウヅ美術大学名誉博士号とウヅ市名誉市民号を受けた。

2004年、ウヅ大学考古学部教授で国立ウヅ考古学民族学博物館教授でもあった故ヤジジェフスキ氏と、ポーランドの日本語教育の草創的存在である故梅田忠良関西学院大学教授との友情が基になり、地方都市における日本語教育文化の情報発信センターとして梅田記念ホールが博物館内に設立され、(法)梅田忠良教授記念ポーランド日本教育文化センターとしてポーランド日本協会ウヅ支部から独立し、教育文化普及事業を始めた。このような方々の尽力により、現在まで日本語教育文化活動がウヅ市で継続されている。

### 3. 現在のウヅ市における日本語教育文化活動

ポーランドと日本の文化協定締結に伴い、1978年にポーランドにポーランド日本協会(日本に日本ポーランド協会)が設立され、1982年にはウヅ、クラクフ、ポズナニに独立の地方支部が設立された。ウヅ支部は非営利活動を目的とする文化交流団体として政府の認可を受けた唯一の支部として、日本語市民講座などの教育文化普及事業を始めた。毎年日本文化週間を開催し、日本語教育や日本文化紹介プログラムを通して一般市民の日本理解を深め、日本学科進学希望学生などを輩出するようになった。1980年代初めには、それまでワルシャワ大学日本学科の学生が優勝を独占していた日本大使館主催日本語弁論大会で、市民講座受講生が初めて優勝し、日本語は大学の日本学科以外でも十分学べるという認識が市民に定着し、市民講座の役割が評価される一因となった。

こうした背景の中でウヅ工科大学、ウヅ第三大学(社会人高齢者のための公立生涯学習機関)、ウ

日本春の日展  
2016.1.30-31

(左) 室内庭園前  
でお茶会  
(下) 学生発表を  
一心に聞く市民



ヅ大学などでも日本語授業が取り入れられ、さらに教育委員会の要請で中学、高校特別科目授業として巡回日本文化教育授業も行った。1992年より JICA 青年海外協力隊ポーランド派遣隊員現地直前訓練を受け入れ、教育文化事業を(法)梅田忠良教授記念ポーランド日本教育文化センターが引継ぎ、協力隊撤退までの15年間担当した。その後民間からの派遣になった日本語教育ボランティアの研修も毎年9月にウヅで行われている。

日本側、ポーランド側のさまざまなウヅ関係者の協力を経て、現在は①毎年11月中旬の1週間にウヅ市日本ウィーク(1982年に始まり今年で34回目、ポーランドで一番古い日本週間事業)、②2月初めの週末に植物園日本春の日展(冬の間植物園は閉鎖されるので、植物園建物内に日本庭園を造り庭園観賞、ポーランド人学生たちの日本発表やお茶会、浴衣試着などを催す。桜の咲く春には植物園でお花見会を開き、市民に日本の春を楽しんでもらう。2002年から開催)、③5月中旬の土曜日に全国国立博物館協会主催博物館オールナイト朝までニッポンプログラム(夕方5時から翌日午前3時まで全国の国立博物館が市民に無料開放されるイベント。民族考古学博物館の



第2回ウヅ市日本語スピーチフェスティバル  
(2016.6.5) 参加者、左端4列目が筆者

プログラムとして書道、折り紙、水墨画ワークショップなどを実施)、④年度末の6月にウヅジ市日本語スピーチフェスティバル(昨年からはまった最新プログラム。日本語のスピーチ技術力を競うよりも日本語を楽しむ交流の場として、市内で日本語を学ぶ生徒、学生、社会人が日本語を通して交流・発表し、ウヅジ滞在の日本人留学生がポーランド語で発表する。今年は54名が参加などのほか、ウヅジ工科大学での日本語市民講座、民族考古学博物館での水墨画教室などが通年で毎週開催されている。

#### 4. 終わりに

私が初めてウヅジの街へ来たのは1978年秋、留学生としてだった。札幌から横浜へ行き、船でナホトカへ向かい、モスクワ経由、列車でワルシャワ、ウヅジへ辿り着いた。終着駅の、街の中央にあるファブリッチナ駅ホームに降り立ったときは、長旅の安堵とついに来たかの思いがまさり、まさかその後この街で働き、生活するようになるうとは夢にも思わ

なかった。経済不安、自由化闘争、戒厳令、社会主義崩壊、EU加盟という激動の中で、クロウ教授と一緒に日本協会ウヅジ支部立ち上げ、工科大学日本語教育事業などを行い、ポーランド人女性と家庭を持ち、娘を育て、今年7月末その娘が結婚した。娘が生まれたのは、ヨーロッパ東西陣営の地殻変動が起こり、日本は昭和から平成に移行した1989年だった。平和の泉、和を伝える泉になってほしいという思いを込めて和泉と命名した。クロウ教授が健在であったなら、誰よりも娘の晴れ姿を喜んでくださったに違いない。私は微力ではあったが、草の根交流として今日まで継続して続けられたのは、周囲の理解と家族に支えられてのことだった。

今回これまでの活動を振り返り思いを新たにする執筆の機会を与えてくださった安藤会長と小笠原副会長に感謝申し上げます、双方向の継続がさらに豊かなものとなるよう継続する大切さを感じている。

「北海道ポーランド文化協会の皆さん、これからもどうぞよろしく！」



〈後援イベント〉のお知らせ

### 李政美 (イジョンミ) コンサート

曲目:今日は帰れない(ポーランドパルチザンの歌)ほか、2016年9月21日(水)19:30~、札幌豊平館、料金3,000(当日3,500)円;9月22日(木・祭)19:00~、小樽文学館、料金2,500(当日3,000)円、予約・お問合せ:熊谷 080-4045-1461

札幌豊平館、小樽文学館という歴史文化の息づく空間でイジョンミさんの感動の美声を共に感受出来ましたら、本当に嬉しい限りです。(熊谷敬子)



### 遠藤郁子ピアノリサイタル「ショパン序・破・急・幻」

2016年9月15日(木)19:00~、六花亭札幌本店6Fふきのとうホール(北4西6)、入場料5千円、お問合せ:オフィス・ワン 011-612-8696

能の演目に見立てたショパンの音魂(おとだま)が幽玄の世界に響く。いのちの深淵を見たピアニストが紡ぎ出す魂の音楽。

#### 《第77回例会》(第2回東京例会) 報告

### 遠藤郁子ピアノリサイタル「ショパンと私とポーランド」

2016年6月23日(木)18:30より、ポーランド共和国大使館ホールにて、遠藤郁子ピアノリサイタル「ショパンと私とポーランド」が開催され、約100人が遠藤郁子さんの全曲ショパンのすばらしい演奏に聞き入りました。演奏終了後には、コザチェフスキ大使から花束が贈呈され、またポーランド広報文化センター主催のレセプションが催されました。(東京事務所長 霜田英磨、写真:尾形芳秀)



《ポーランドだより》

# 我ら、ポーランド人

～ポーランド洗礼1050周年記念行事から～

津田 晃岐

## 1. 国家草創——グニェズノ

今年2016年はポーランドにとって特別な年だ。というのも、西暦966年にポーランドがキリスト教を受容してから1050年目、つまりポーランド洗礼1050周年なのだ。ポーランド国家の洗礼とは、直接にはピヤスト王朝の祖ミェシュコ1世(在位960頃-992)が洗礼を受けたことを指す。ポーランド公(「王」の称号を戴くことは生涯なかった)ミェシュコ1世は965年、ボヘミア公国(現在のチェコ)のボレスラフ1世残酷公の娘でキリスト教徒のドブラヴァと結婚し、翌966年、自らも洗礼を受けた。それに伴って、ミェシュコ1世の統治のもと初めて国家として形成されつつあったポーランドもキリスト教化されていった。

当時の国家は統治者の本拠地である都市国家とその版図から成っていたが、統治者たちは必要に応じて本拠地を変え、その都度、周囲に防壁を巡らした囲郭都市を築いていった。そうした本拠地の中で最も重要なのはグニェズノ(ヴィエルコポルスカ県)で、長くポーランド黎明期の首都であり続けたため「ポーランド国家草創期博物館」はグニェズノにある。また、ポズナンもそうした本拠地の一つで、市内を流れるヴァルタ川の中州オストロフ・トゥムスキ(「司教座聖堂の島」の意)には囲郭都市が築かれ、ミェシュコ1世の館と礼拝堂とがあった。

そうした訳で、今年になって続いたさまざまなポーランド洗礼1050周年祝賀イベントの「中心式典」がグニェズノ(4月14日)とポズナン(4月15-16日)で行なわれたのは、ごく自然だった。

中心式典2日目にはポズナン国際見本市で、つまりポーランド史上初めてワルシャワの外で、国会が召集された。大統領、国会議員、首相と諸大臣、



ポズナン国会で演説するアンジェイ・ドゥダ大統領  
2016.4.15 (fot. Paweł Kula, flickr/sejmrp)

さらに1200名もの国内外からの賓客が列席する中、上下院によって採択された決議文が読み上げられ、「国家の創建者たち、並びに我々のアイデンティティを確定する原則に忠実であり続けた、全世代のポーランド人への感謝」が表明された。そしてアンジェイ・ドゥダ大統領が演説し、誰もが持つ自分のルーツを、ポーランド人はローマ・カトリック教会に持っていることを、喜びと誇りとともに訴えた。

「伝承によれば、ポラン族の統率者の洗礼はほぼ間違いなく966年の4月14日、聖土曜日に行なわれました。そしてその時ポーランドもまた生まれたのです。洗礼の水から新しいキリスト教的な生命へと生まれたのです。先史時代を抜け出しヨーロッパ史の舞台に登場したことで、世界にとって生まれたのです。民族的かつ政治的共同体として、自身にとって生まれたのです。というのも、ラテン典礼による洗礼の受容は、私たちのポーランドのアイデンティティを決定したからです。このときから、私たちは自分たちについてこう考え、言うようになったのです——『我ら、ポーランド人』と!」

## 2. 洗礼あるところ希望あり——ポズナン

そもそも、どうして1000年ではなく、1050年をかくも盛大に祝うのか?——その答えは、50年前のポーランドが置かれていた状況を考えれば納得が行く。50年前にも「ポーランド洗礼1000周年」の祝賀は行なわれたが、カトリック教会と対立する共産主義政権は「ポーランド国家建国1000周年」を喧伝し、「洗礼1000周年」のためにポーランドに来るはずだった教皇パウロ6世の訪問を拒絶した。そのため教皇の代理として、ポーランド首席大司教のステファン・ヴィシンスキ枢機卿(1901-81)が「黒い聖母」像のレプリカとともに、チェンストホヴァをはじめ主要都市を回った。どこでも数十万人の信者が枢機卿を迎えたが、それは常に共産主義政権との緊張を孕んだ祝賀だった。

それから50年、現在のポーランドはEUの一員として政治的にも経済的にも安定している。だが他方で、EUという大国の一地方として、発展と引き換えに自国の独自性を失っているのではないかと

いう危惧も聞かれる。カトリックのポーランドか、EUのポーランドか——現代ポーランド人のアイデンティティはこの間で揺れている。それに対して、大統領は演説の中で「競争とビジネスよりも連帯感、共同体意識が優先するポーランドとヨーロッパ」を提案し、ヨハネ・パウロ2世の言葉を引用して「ヨーロッパはポーランドを必要とし、ポーランドはヨーロッパを必要としている」と演説を結んだ。

式典3日目は終日ポズナン市営スタジアムで行なわれた。市民ボランティアのコーラス団が歌う祝賀賛歌「洗礼あるところ希望あり」とともに式典が始まり、祝賀ミサと成人の洗礼式とが行なわれ、ミュージカル「ジーザス・クライスト・スーパースター」がポズナン音楽劇場の俳優によって演じられ、3万人を超える会衆が参加した。この歴史的イベントに喜びと誇りをもって、自ら進んで参加したボランティアの数は計り知れない。賛歌とともに祝賀式典が始まる中、突然、妻の携帯電話にメールが届いた。スタジアムの観客席の一部を占めるコーラス団の一員として今まさに歌っているという友人からだった。「歌っているから、テレビで見つけてみて！」

### 3. ワールドユースデー(WYD)——クラクフ

4月の演説で大統領が述べたように、ポーランド洗礼 1050 周年の「クライマックスは教皇フランシスコのポーランド初訪問とワールドユースデー」だった。教皇は前回 2013 年のリオデジャネイロ大会の終わりに、次のワールドユースデーの会場はクラクフと宣言した。ポーランドは洗礼 1050 周年の年に教皇に会おうと世界中からやって来る数百万人の若者を歓待するホスト国に指名されたのだ。

こうして教皇フランシスコは、ドゥダ大統領らも出席する中ヤスナ・グラ(チェンストホヴァ)でポーランド洗礼 1050 周年の記念ミサを執り行い(7月 28 日)、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所を訪れて祈りを捧げ(7月 29 日)、クラクフのワギェヴニキにある「神の慈しみの聖地」で若者たちの告解を聞き、隣接する「ヨハネ・パウロ2世の聖地」でミサを行なった(7月 30 日)。ちなみに今年はポーランド洗礼 1050 周年、WYD クラクフ大会開催年に加えて、ポーランドの二聖人、聖ファウスティナ・コヴァルスカと聖ヨハネ・パウロ2世に関係の深い「慈しみの特別聖年」としてもバチカンによって定められている。その後、教皇はヴィエリチカ岩塩坑に近いブジェギの「慈しみのキャンパス Campus Misericordiae」で若者たちと徹夜の祈りに参加し翌朝(7月 31 日)大会フィナーレのミサを行なって WYD を終えた。このほか教皇はクラクフ市内のブウォニャ広場でも



WYD 参加の若者たちと教皇、ブジェギの「慈しみのキャンパス」にて (fot. flickr.com/episkopatnews/Mazur)

若者たちと直接会い(7月 28-29 日)、毎晩夕食後、滞在中の大司教館の「教皇の窓」に姿を見せ館前に集う若者たちに話し掛けた。

一方、若者たちは一週間ほど前からポーランドに来て各司教区で歓待され、観光したり、晚餐会で歌ったり踊ったり、福音を伝えたりしながら、教皇を目指してクラクフへ向かった。マスコミによると、フィナーレのミサには 250 万人もの巡礼者が参加したという。この巡礼団を家に泊め、食べさせ、時には車で運んで、至れり尽くせりのホームステイを提供するのが、今回ポーランドの役目なのだ。

私の住むポズナン司教区にはペルー、オーストリア、アメリカ、マルタ、メキシコ、フランス、スペイン、ウクライナ、カナダ、マダガスカルの若者たちが来た。皆ポーランドでの歓待ぶりに感激し満足してクラクフへ発ったようだ。ポーランド料理のピエロギ(ポーランド風水餃子)が大人気だったとも聞いた。

ヴウォツワヴェク(ワルシャワとトルンの中間にある都市)に住む私の義父母もアルゼンチンからの巡礼者ヴィルジーニアとテレザをホームステイさせた。英語も話せないのに大丈夫かと心配したが、コンピュータの自動翻訳サイトを介して問題なく会話できたという。テクノロジーの進歩に時代の変化を痛感すると同時に、しばしばポーランド人の国民性としても挙げられる「おもてなしの心 gościnność」が変わらず健在なのを嬉しく思った。(つだ てるみち)



ヴウォツワヴェクを訪れた WYD 巡礼団と筆者の義父母クシシュトフとマリア(前列左端)

# 錬金術師センディヴォギウスの亡霊

栗原 成郎

センディヴォギウスという奇妙な名のポーランド人の錬金術師に興味をいだくようになったのは、渋澤龍彦の『黒魔術の手帖』(初版は桃源社 1961 年、後に河出文庫)に収められた「薔薇十字の象徴」という文章を読んだ時からである。渋澤の文章は、卑金属を金に変えるいわゆる「哲学者の石」(あるいは「賢者の石」)lapis philosophorum を所有しているスコットランド出身の錬金術師アレクサンダー・シートン Alexander Seton が、錬金術の秘密を訊き出そうとしたザクセン選帝侯クリスティアン II 世のために投獄され、拷問を受けていたのを、センディヴォギウスによって救出され、そのお礼に死ぬ前に「哲学者の石」を命の恩人に譲り渡したところで終わっている。その話の前後を知りたくなったのである。

ヨーロッパに名を知られた錬金術師ミカエル・センディヴォギウス Michael Sendivogius は、16 世紀後半から 17 世紀前半に数奇な運命の人生を送ったミハウ・センヂヴィ Michal Sędziwój というポーランド人で、1566 年にポーランド南部山岳地の町ノヴィ・ソッチ Novi Sącz (現マウオポルスカ県)近郷のウコヴィツァ Łukowica に由緒ある貴族の息子として生まれた。幼年期のことはほとんど知られていないが、神童の誉れ高く、成人前にクラクフのアカデミーに入学。当時のクラクフ大学では、多くのヨーロッパの大学と同じように、錬金術が非公式ながら科学の一部門として研究されていた。センヂヴィはこの分野に興味をもち、化学の研究に励んだ。

彼の才能は大貴族で有力な政治家ミコワイ・ヴォルスキ Mikołaj Wolski (1553-1630) の目に留まり、自身も錬金術の研究家だったヴォルスキは彼の研究を支援した。1588 年ころ彼はヨーロッパ遊学の旅に出る。その費用は、プラハに居城をもつ神聖ローマ皇帝ルドルフ II 世(在位 1576-1612)の宮廷とつながるヴォルスキの援助によったと思われる。ヨーロッパ遊学中、センヂヴィは当時一流と言われた錬金術師たち—ジョン・ディー John Dee (1528-1608)、エドワード・ケリー Edward Kelley (1555-95)ら—を歴訪し、彼らから知識を汲み取り、化学的処理法のレシピや手稿を買取った。彼はライプツィヒ、ウィーン、アルトドルフの諸大学でも学んだ。

センヂヴィの生涯に起こったミステリアスな挿話として、渋澤が紹介しているのが錬金術師アレクサンダー・シートンとの出会いである。シートンは、錬金

術を疑問視するフライブルク大学教授のヴォルフガング・ディーンハイムとバーゼル大学医学教授ツウインガーの面前で、るつぽに鉛と硫黄を入れて炉の火にかけて熱し、そこに少量の粉末を入れて鉛と硫黄の溶液を純金に変えて見せ、卑金属を金に変成させる秘密を知っているとして、ザクセン選帝侯クリスティアン II 世によって捕らえられていた。選帝侯は「哲学者の石」製造の秘法について口を割らせようと、シートンを鉄の串で刺す、焼き鑊(こて)を当てるなど、むごたらしい拷問にかけた。センヂヴィはアルトドルフで勉学中にシートンの知遇を得たようで、彼の苦境を知って選帝侯の都ドレスデンに赴き、その出獄の手助けをした。センヂヴィがどのような方法で彼を救出したかは伝えられていないが、おそらく、自分の後ろ楯であるヴォルスキや皇帝の力を借りたのであろう。シートンは救出に感謝し、センヂヴィに「哲学者の石」と思える粉末を1オンス贈ったという。その後まもなくシートンは拘禁と拷問が原因で衰弱死した。伝説によれば、センヂヴィは彼の若い未亡人ヴェロニカと結婚した。

その後、センヂヴィはルドルフ II 世の招聘に応じてボヘミアに赴き、プラハ城内でシートンから譲られた粉末を用いて実験を行ない、錬金術の賞賛者である皇帝を納得させるに十分な成果を見せた。そのことは、皇帝が《Faciatur hoc quispiam alius, quod fecit Sendivogius Polonus》(ポーランド人センディヴォギウスが為したることを他の者も為さんことを)というラテン語の銘を刻んだ大理石板を王宮の壁に設置させたことから確からしい。センヂヴィが用いたシートン秘伝の魔法の粉末は、金メッキを可能にする一種の化合物であったかもしれない。センヂヴィは 1590 年代から 1600 年代初めに皇帝の庇護のもとにプラハで活動し、ほぼ同時期にポーランド王ズィグムント III 世 Zygmunt III Waza (在位 1587-1632) の宮廷にも出入りした。

1605 年センヂヴィはヴェルテンベルク Württemberg 公フリードリヒ I 世の招きでシュトゥットガルトに赴いた。公は錬金術に異常な関心を持ち、多くの錬金術師をか



ミハウ・センヂヴィ  
Łuszczkiewicz 画、  
1862

かえ、シートンもかつてその宮廷にいた。公のお気に入り  
の錬金術師ヨハン・ミュラー・フォン・ミュレンフェルス  
Johann Müller von Mühlentfels は、おそらく公と結託して  
センヂヴィイの秘密の粉末を手に入れるため陰謀を企てた。  
センヂヴィイは城の塔に幽閉され、彼の粉末を納めた箱を  
はじめ貴重な所有物はすべて没収された。センヂヴィイは  
(おそらく監禁者側の念入りな仕掛けにより)脱走して、自  
分の災難をルドルフ II 世とズィグムント III 世に訴えた。  
公はその圧力に屈し、陰謀の元凶ミュレンフェルスは裁  
判にかけられ絞首刑に処せられた。

これらの事件の後、センヂヴィイはポーランドに帰り、  
錬金術に異常な関心をもっていたズィグムント III 世の信  
頼を得て王室秘書官となり、錬金術の研究に専念した。  
ヤン・マテイコは、センヂヴィイが王の前で錬金術の技を  
示している場面を描いている。



錬金術師センヂヴィウゴウス  
Jan Matejko (1838-93) 画、1867

しかし時とともに王との関係は冷えこみ、センヂヴィイ  
はヴォルスキから資金援助を得てその領地クシェピツェ  
Krzepice (チェンストホヴァの西北) に実験室を建設し錬  
金術の研究を続けた。金製造の成果は見られなかったが、  
彼の研究は中央ヨーロッパにおける冶金工業、化学工業  
の基盤を築くことになった。

その後センヂヴィイはポーランドを去り、神聖ローマ帝  
国の新帝フェルディナント II 世 (在位 1619-37) の顧問  
官となり、ウィーンとワルシャワとをつなぐ外交官的な  
働きをし、またシレジア (シロンスク) における皇室用の  
銅、鉛の採鉱場の建設を指導した。皇帝に尽くした政治  
的貢献によりクルノフ公爵領に領地を下賜され、クラ  
ヴァジェ Kravaře (現在のチェコ共和国東端) に住み、  
1636 年そこで世を去った。

センヂヴィイはパテン師的な錬金術師ではなく、硝石  
が加熱される時に放出される酸素の存在に最初に気づ  
いた化学者として評価されている。

当時の中欧の支配者たちはセンヂヴィイに金を創り出す  
夢を託したが、彼の故郷ポーランドのノヴィ・ソ  
ンチの町民は、今も黄金出現の見果てぬ夢を見る。  
毎年、大晦日の深夜、大学教授の講義用ガウンに身  
をつつんだセンヂヴィイは、ノヴィ・ソンの旧市街を悠  
然と歩きながら自分のまわりに金貨を振りまく。地面  
に落ちる金貨の音は聞こえるが、錬金術師の姿は月  
夜にも影を落とさない。センヂヴィイの亡霊を見た人  
は幸運に恵まれた素晴らしい年を迎えるという。  
(くりはら しげお)

### “Grill”シーズン

近ごろポーランドでは、五月から夏の終わりにかけて“grill”  
をするのが流行っています。“Grill”は“バーベキュー”を意味する  
新しい外来語です。親しい者同士が庭に集まり、食べたり飲んだり  
しながら、暗くなるまで語り合います。私たちがイエズス会の神  
父さんたちから修道院の中庭での“grill”に招待されました。

w skwarze południa  
nad koszem z owocami  
latają osy

灼ける午後  
果実の籠に  
飛ぶ蜂や

ボズナン市、津田モニカ  
Monika Tsuda, Poznań

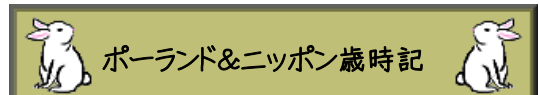
dźwiękami grzmotu  
deszczu i wiatru śpiewem  
gra nawałnica

かみ鳴りと  
風雨の歌で  
嵐奏(ひ)く

ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ  
Piotr Wrzeciono, Warszawa

年寄れば少し丁寧花を見る  
暗闇にをんな差し出す冷奴  
雁帰る人生軽みカルパッチョ

岩見沢市、霜田千代磨



今後の予定(本号1、2、11ページ参照)

〈後援〉遠藤郁子ピアノリサイタル「ショパン序・破・急・幻」、9月15日(木)19:00～、六花亭札幌本店6Fふきのとうホール(北4西6)

〈後援〉李政美(イジョンミ)コンサート、9月21日(水)19:30～、札幌豊平館(中島公園1);9月22日(木・祭)19:00～、小樽文学館(小樽市色内1)

《第78回例会》レクチャーコンサート「ショパンとバロックの精神」、10月2日(日)13:30～、札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール(北16東9)

《第30回定例総会とお茶の会》10月29日(土)総会14:30～・お茶会15:30～、北大クラーク会館3F国際文化交流活動室(北8西8)

『ポーレ』原稿募集

エッセイ(旅行記、新刊紹介、映画・演劇・演奏会の感想)、研究(歴史、社会、経済)、俳句・詩その他なんでも歓迎。事務局へご連絡ください。

住所変更・メールアドレスを事務局へご連絡を!

転居された方、イベント予定などのメールが届いていない方は、事務局へご連絡ください。

事務局:電話・FAX 011-556-8834(安藤)  
メールhokkaidopolandca@gmail.com

入会・退会(ご芳名)

入会(2016.6)稲川和幸、熊谷敬子、若松雅迪、退会(2016.8)佐光伸一(敬称略)

ご寄付(維持会費)ありがとうございます(ご芳名)

稲川和幸(2)(2016.4～7)  
※1口千円、( )内は2口以上の口数、敬称略

新年度(2016.9～2017.8)会費納入のお願い

年会費(一般3千円、学生1,500円)と、維持会費(任意のご寄付1口千円)の納入をお願いします。

【郵便振替口座】記号 02740 5 番号 19735

【加入者名】北海道ポーランド文化協会

※ 事務効率化のため、送金はできるだけ郵便局のATM扱い(手数料は無料[2016.10以降は月3回まで無料])でお願いします(ゆうちょ口座をお持ちでない場合も局窓口にご相談ください)。



※ 個別の納入お願い文書と振替用紙を同封します。  
※ 年会費は年度はじめ(9月)に納入をお願いします。  
※ 総会・お茶の会でも会費を納入できます。

## 目次

第30回定例総会とお茶の会(お知らせ)	1
《第78回例会》レクチャーコンサート「ショパンとバロックの精神」(お知らせ)	2
紙芝居「わたしはテイコです」について(田村和子)	3
《新会員のひと言》(若松雅迪、稲川和幸、熊谷敬子)	4
第6回「午後のポエジア」スケッチ(若松雅迪)	6
タデウシュ・ルジェーヴィチ「生き残り」(栗原成郎訳・解説)	8
ウヅィからのご挨拶(吉田勝一)	9
〈後援イベント〉のお知らせ 李政美(イジョンミ)コンサート/遠藤郁子ピアノリサイタル	
「ショパン序・破・急・幻」/《第77回例会》(第2回東京例会)報告 遠藤郁子ピアノリサイタル	
「ショパンと私とポーランド」	11
《ポーランドだより》我ら、ポーランド人～ポーランド洗礼1050周年記念行事から(津田晃岐)	12
錬金術師センディヴォギウスの亡霊(栗原成郎)	14
ポーランド&ニッポン歳時記(津田モニカ、ピョートル・ヴジェチョノ、霜田千代麿)	15

POLE

第89号 ポーレ編集委員会

氏間多伊子/尾形芳秀/栗原朋友子/越野剛/ラファウ・ジェブカ